

豊かな人間性を培う家庭教育の推進

－「思春期」家庭の支援の在り方－

家庭教育係長 乾 義輝

INUI YOSHITERU

要 旨

思春期の子どもは、体の大きな変化に伴う心の変化からくる特有の不安定さを生み出すが、それは親から離れ、大人として自立していくための通過点でもある。この時期の子どもと向かい合う親は、新しい親子関係を築いていかなければならない。思春期の子どもとその親を取り巻く現代の環境や課題などを明らかにし、思春期家庭の支援に役立てる。

キーワード： 思春期の子ども、親離れ、自立、新しい親子関係

1 はじめに

すべての子どもが、思春期を通過して大人になる。思春期は、子ども時代の総決算であり、大人になるための最終的な点検・調整・試行の時でもある。思春期には乳幼児期から十数年かかって獲得した「生きる力」が大人として自立するにふさわしくしっかりしているかどうかテストされるのである。子どもは、この時期に、すばらしい変化を遂げる。しかし、一方で、これまでの十数年のいろいろな歪みが現れ、不登校、非行、あるいは精神病の兆しなどの問題が噴出するのもこの時期である。現代の子どもには、子ども時代の後半にしっかりと大きく成長し、十分な力をもった、自立した大人に成長してもらいたい。しかし、現実にはこの思春期で挫折し、苦勞の多い大人時代を始める子もいる。思春期は、子ども時代の総決算であり、子どもが思春期になって急に思春期の問題が起こるのではない。子どもが思春期をいきいきと生きぬき、大人になることに希望がもてるように、大人は、それまでの子どもとの関係を振り返りつつ、思春期の子どもに対して果たすべき役割を真剣に考えねばならない。本研究では、深刻な問題を抱える思春期の子どもとその親を取り巻く現代の環境や課題などを探り、思春期家庭の支援に役立てる。

2 研究目的

思春期の子どもとその親を取り巻く現代の環境や課題などを探り、それらを明らかにするとともに、大人は思春期の子どもにどのようにかかわるべきかを明らかにし、思春期の子どもをもつ家庭の支援に役立てる。

3 研究方法

- (1) 思春期について
 - ア 思春期の概念
 - イ 思春期と脳の発達
- (2) 現代に見る思春期
 - ア 思春期の子どもをもつ親の世代背景
 - イ 思春期の子どもをもつ親といまの時代

- ウ 思春期の子どもを理解
- (3) 思春期の子どもとその親との関係
 - ア 親離れと子離れ
 - イ 親（大人）は子どもとどう向き合うか
 - ウ 自己変革をとげる親

4 研究内容

(1) 思春期について

日本では、寺子屋が成立していた室町時代に登校拒否や不登校があったという記録はない。昔も思春期になれば、体に大きな変化があり、性に目覚めることには変わりなかったと思われる。人生は生まれや家によって縛られ、生き方の選択など考える余地もないほどに貧しさに追われていた。日々食べていくことに精一杯の庶民には、子どもにお節介を焼く暇などなかった。過保護の親もいなかったであろう。この時代には思春期はなかったものと推定される。一方、西洋では、学校はフランス革命で成立した憲法（1791年）で公教育として明文化され、イギリスでは18世紀以降、寺子屋式学校（dame-school）が広がった。その辺りから、幼児教育に続く学童期というステップが社会によって構築され、そこに集う子どもが次第に増加していった。世間の子どもを網羅する力が学校に強まるにつれて、学校に在籍する年齢を社会は次第に高めていった。こうして思春期ができたとは言わないまでも、そういう歴史の変化と思春期の成立とはだいたい平行しているようである。イギリスの社会心理学者マスグローヴは「思春期は蒸気機関車とともに発明された」とうまく形容している。思春期は、発展国の近代化とともに、社会制度であるかのように作成されてきたものであることを、思春期問題を考える際には注目しておく必要がある。

ア 思春期の概念

思春期は、英語でpuberty（生殖が可能になる年齢を言う。アメリカでは男は14歳、女は12歳と法律で決めている州が多い。）やadolescence（pubertyから成年までの期間を言う。）と表す。児童期と成人期間の成熟期と考えられている。成熟に向かう思春期の始まりは、男子で14歳頃、女子で12歳頃である。成人期に入る時期は文化によって違いはあるが、両親から独立し、個人としての務めを果たし始めたときとされている。思春期には、脳下垂体の働きが活発になり様々な生理作用をもったホルモンが多くでるようになる。成長ホルモンが、急速に体の発達をもたらす、約2年でほぼ大人の身長と体重になる。このような急激な成長は、男子より女子に早く現れ、性的な成熟も女子のほうが早い。女子が性的に成熟すると月経がおこり、男子では精液がつくられるようになる。思春期の精神社会的な発達課題は、他人に依存する人間から独立した人間へと成長することである。あるいは、自己を確立することによって、はじめて大人のやり方で他人との関係を結べるようになることである。

イ 思春期と脳の発達

人間の脳神経細胞は、生後細胞分裂をすることがないと考えられている。胎児期は盛んに細胞分裂を繰り返し、出生の頃には完了している。その細胞の数は、約140～170億個とも言われている。ここで大切なことは、生後の脳神経の発達が、外界環境からの刺激を受け、それに適応していくという形で人間社会に依存している点である。つまり、人間関係が豊かな環境か、機械に囲まれ、人間関係が希薄な環境かなど、その人間社会の在り方が、子どもの脳の発達に大きな影響を与える。一般的に動物の子どもは、外界環境の刺激に対して機敏に反応し、行動する反射系をもっており、それが脳神経の生理的発達を促進させるメカニズムである。従って、発達に適切な外界の刺激を子どもに十分に与えるという責任が大人にあると言える。刺激がないと、大脳のそ

れに対する領域が発達不全になると推論できるからである。また、神経細胞の働きは、一定の月日が過ぎると固定してしまう。外界の刺激に反応することを通じてその神経細胞の機能がつくられる可塑性のタイムリミットを臨界期と呼んでいる。

喜怒哀楽（感情・感性）をつかさどる前頭葉の前頭前野の軸索の髄鞘化は、生後4、5か月頃から始まって、思春期を経て、20歳になってやっと完成すると言われている。軸索の髄鞘化とは、いわば各駅停車を新幹線に改造するようなもので、神経の伝達速度をあげることを意味している。それは、子どもの身体の成長、行動の発達と並行している。赤ん坊が、立ちあがり歩き回れるようになるためには、この髄鞘化の進行が必要なのである。そして、たくさんの生活体験を経ながら、最後に前頭葉の神経細胞の軸索の髄鞘化が、思春期から青年期にかけて完成にむかうと言われている。つまり、必要なときに十分な刺激を与えなければ、臨界期を超えてしまってからでは、回復させようにも不可能か、あるいは不十分な回復（傷害を残す）しかできないこともある。思春期を含め、子どもの発達を、その時その時に大人が責任をもってしっかりと見ていくことが大切である。

(2) 現代に見る思春期

最近の思春期は、どのような社会的影響を受けているのか。最大の変化は、思春期が伸びたという現実である。現在の思春期の子どもは祖父母の時代は、過半の人が高等小学校卒業の学歴であり、旧制中学を卒業して17歳で就職すれば、大人となっていた。10代で結婚する女性も少なくなかった。ところが今や、20代半ばを過ぎてなお大学生であったり、定職に就くことをためらっている若者がたくさんいる。大人になろうとしない、あるいは大人になれない若者が増えて、思春期は次第に長くなってきている。一方、身体成長や第2次性徴の登場が早まり、思春期の始まる時期も下方に向けて若干伸びてきている。

ア 思春期の子どもとその親の世代背景

いま思春期の子どもは、1960年前後に生まれ、我が国の高度経済成長とともに育ってきた世代である。池田内閣の「所得倍増計画」に始まり、新幹線開業、東京オリンピック、「三C時代」（テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫に代わりカー、クーラー、カラーテレビが家庭の三種の神器といわれるようになった時代）、国民総生産が自由陣営第2位、「昭和元禄」、日本万国博覧会といった経済の右肩上がりの時代を子ども時代に経験してきている。また、その時代は、学力テストの全国一斉実施（1961年）など、受験競争、進学競争の洗礼を受けて育った最初の世代と言える。子ども時代に競争原理の洗礼を受け、いままた更に過酷な競争にさらされている親は、ともすれば競争原理に支配された目で子どもを見、企業社会を支配する競争原理の中で勝ち残れる子どもに育てたいとの思いで子どもと接することになりがちである。その結果、子どもは、「よい子」でないと見捨てられるという脅しを親からも受けながら、自分の頭で考え、自分の心で感じたことに依拠しながら自由に自分の人生を選択していくことが困難になるのである。そこには、過酷な競争社会に脅され、見捨てられる不安に駆り立てられて生きる親が、わが子を脅して「よい子」競争に駆り立てるという図式が見られる。

イ 思春期の子どもをもつ親といまの時代

いまの思春期の子どもをもつ親のほとんどのが、ほぼ「中年期」にあたるものと考えられる。その「中年期」は安定した時期であるように見えて、実は大きな肉体的、精神的変化の起きる危機であり、移行期であることが最近明らかになってきた。限りある自分の命や自分の限界を教えられ大きな肉体的、精神的変化は多くの中年が経験することであるが、時には「自分の人生はこれでよかったのか」「このままの生き方でいいのか」という問いをもたらし、自分の生き方や価

価値観をもう一度問い直しそれを再構築していくことを迫られる時期でもある。この時期は思春期に対して思秋期と呼ばれている。思春期、青年期を経て、人生の前半期に選択し築き上げてきた職業や結婚生活、生き方が本当にそれで良かったのかという思いにしばしばとられるのもこの時期である。こうした「中年期」にいる親たちは、同時に企業社会の側からは、バブル崩壊後の企業のリストラにあわせて自分自身をリストラ、再構築していくことを迫られる。つまり、いま思春期の子どもをもつ親は、思春期と思秋期の二重の意味での人生の大きな節目にあると言える。

ウ 思春期の子ども（中学生の時代）の理解

思春期には、幼児期以来拠としてきた価値観や自己像を検討し直し、今後は親から与えられたものとしてではなく自ら選択した拠として（自分らしい）価値観や自己像につくり直していく時代である。彼らはこの時期、それまでの自分はいやだと子ども時代の自己像を崩しはじめながらも、その一方では新しい自己像にまだ出会えなくて不安定に揺れる境界期を生きている。中学時代は新しい世界や自分に出会うという歓喜に満ちた時代であるとともに、ややもすると自分を見失いそうになるほどの悩み多き、思春期葛藤の時代でもある。昔のように社会の変化が遅く絶対的な価値観がはっきりとしていた時代には、目標とすべき社会的自己像がはっきりしているから、思春期の課題は比較的すんなりと達成されることができた。昔は働く体力と技術を身に付けさえすれば大人になったとみなされたが、これに対して、現代社会では青年が一人前とみなされる基準ははるかに複雑で高度なものであり、しかも、その基準は発展的で流動的で曖昧であるから、親にも青年自身にもこれで大人になったというスタンダードがみえにくい。最近の小学校高学年の児童から中学生は、親や教員の期待を読み取って自分の言動を大人の意向にそったものにしようとし、「よい子」を演じようとする性向がある。大人の願いを一方的に取りこむだけの「よい子」には、自分の本音とか感情がどこにあるのかみえなくなる。本音や感情のありかが分からなければ、自分の攻撃対象もみえてこないのは当然であるから、大人に対する攻撃性は影をひそめる。しかし、受験期になると親の期待どおりの「よい子」ではいられなくなる。なぜなら学業成績の不振が親子の葛藤を大きくすることになるからである。過剰な肯定的評価によって育てられてきた「よい子」は、否定的評価にはきわめて免疫力がなく耐えられない子どもであり、他からの批判や攻撃に脆く傷つきやすい子どもである。自分をしばっている価値観を切り離すことのできなかつた子どもは、親たちからももちろんのこと、子ども期の自分からも離脱できないままになり、中学生期の思春期の課題は高校時代に先送りされることになる。現代の子どもは、ダメな自分でもまずそのまま受け止めてもらいたいと願っており、こうした子どもに伝えるべきは、励ましのメッセージでなく、受け止めのメッセージなのではないだろうか。

(3) 思春期の子どもとその親との関係

五年ごとに行われてきたNHKの世論調査（中学生・高校生の生活と意識調査）では、親と子の価値観の差が縮まり、友達のような親子関係が増えてきたと言われる。例えば、子どもにとって贅沢だと親が思うものは少なくなっており、テレビの見方への親の干渉の度合いも弱まっている。総務省の調査では、親子がともにする行動で、食事と会話の次に多いのが、「テレビを見たり音楽を聴く」「買い物に行く」である。ファッションも、音楽も、見るテレビ番組も親子で同じ、あるいはあまりちがいがなくなっている。また、日本青少年研究所の高校生を対象にした国際比較でみる「徳性に関する調査」では、日本の家庭生活で、正直、正義、自立などを学習する機会は少なく、それらを、友人関係を通して学習していることが分かる。

ア 親離れと子離れ

思春期は親離れ、子離れのときでもある。赤ん坊は臍の緒でつながっていた母親と分離し、誕

生して親と新たな関係を結ぶ。そして思春期になると、性に目覚め、自我に目覚めた子どもはこれまでの親との古い関係を断ち切り、新しい関係を結びなおそうとする。それが、親離れ、子離れである。その親離れ、子離れがうまくできない親子が少なくない。思春期が、親離れ、子離れの大きな節目であるにしても、いきなり親離れ子離れをするわけではない。子どもが親の期待や意図どおりに動いてくれず、「ノー」と言ってくれるお陰で、親は少し心に痛みを感じつつも「子離れ」の準備をすることができる。ところが親の期待や意図どおりに動いてくれる「よい子」は、子どもが親とは別個の人間であることに気づかせてくれる機会を与えてくれない。そんな「よい子」が増えているように思われる。子どもは親の期待や意図に縛られ、親離れができず、親も子離れができない。

幼児は心のなかに「安心基地」としての親のイメージが定着している間、安心して親から離れていられる。でもまたそれが薄れると、安心感を充電するために親の元に帰ってきて親の存在を確かめるということを繰り返しながら親離れをする。いま、そのくっついたり、離れたりの往復運動がしっかりできていない子が増えている。親離れの大きな節目を迎えた思春期の子どもも、しばしば親に甘える。べたべたと身体的にくっこうとする子どももいる。親は「思春期を迎えた大きな子どもがなんだ」と思い、拒否的になることがあるが、それも親離れをしていこうとする子どもが「安心基地」を確認しようとする試みである。小さい頃からしっかり親に甘えることができなかつた子どもが、それを取り戻すかのように思春期に甘え直すことはよくある。親離れをするために、親にしっかり出会い、親の存在を確かめる必要がある。親に放置され文字どおり親に出会えていない子も少なくないが、親の期待どおりに生きてきた「よい子」もまた親に出会えていないとはいえない。なぜならば彼らは「よい子」を演じ、自分の素顔で親と出会っていないからである。親もまたわが子の素顔と出会えないのである。そんな関係が思春期まで続き、いきなり親離れ、子離れしようとする、それはとても大変な仕事になることが予想される。

イ 親（大人）は子どもとどう向き合っているか

「ムカツキ」「キレル」子どもは、自分の感情をしっかり感じとり、それを言葉で表現することができない傾向にある。また、いまの子どもは自分の苦しみを心で悩むことができず、苦しみを衝動的な暴力として「行動化」したり、身体症状として表す傾向を強めている。苦しみを心で抱え込み、悩むことができずにそれを外に投げ出してしまうのである。苦しみと一人でまともに向きあい悩むことは、苦しみをいろいろ経験してきている大人でも大変な仕事である。まして経験の乏しい子どもにとっては手に余る仕事である。誰か自分の苦しみにつきあい、ともに悩んでくれる人がいてはじめて苦しみを投げ出さずに心に抱え込み、悩むことができるのである。周囲の大人がそういう救いの手を差し伸べてやれているかといえば、それができていないケースが少なくない。「キレ」て衝動的に一線を越え、他人を破壊したり、自己を破壊したりする子どもは、彼らをつなぎ止める大人との絆が切れてしまっているのである。親にとっての「よい子」というところだけで子どもと繋がっているとすれば、子どもが「よい子」でなくなれば繋がりは切れることになる。

ウ 自己変革をとげる親

思春期の子どもとの問題と直面しながら、自分の生きざまや価値観、自分自身の生い立ちや夫婦関係と向きあい、それらを問い直し再構築していく過程は大変つらく、しんどい過程である。一人で誰の助けも借りずにやり遂げられる仕事ではない。多くの場合、友人や同じ問題を抱える親同士の人間関係に支えられながらできるものである。不登校の子どもの親は最初、学校に行けないわが子を情けないダメな子どもと思い、わが子を受け入れることができない。また、そういうダメな子を育ててしまったダメな親だと自分を責め、自分自身をも受け入れることができない。そ

ういう親が「親の会」に参加し、そこに自分の「居場所」を見つけだすなかで変わっていく。企業社会を支配する競争原理とは異なる、共感原理の生きる受容的な人間関係のなかに身をゆだね、ありのままの自分が受け入れられ、自分を責める心から解放され自分自身が癒されていくなかで、子どもをありのままに受け入れられるようになる。そうすると親としてのわが子への願いや期待に変化が生じる。心から子どもがありがたみの自分らしく生きてくれたらよいという気持ちになってくる。すなわち自分が置く人間関係を組みかえていくなかで、子どもとの関係も組みかえられ、子どもへの願いや期待が組みかえられていく。またそのなかで企業社会の競争原理に支配された「よい子」の生き方を相対化し、それを超える生き方を考えることもできるようになる。今日の日本の企業社会は、有能で役立つ「よい子」のアイデンティティーを常に求めつづける社会である。そのなかで私たちは相対的な有能さを競いあうことを強いられている。そういう社会に対して子どもが問いかけているものは、売り物になる能力を備え有能であることによって自分の価値を証明するというレベルでのアイデンティティーではなく、それぞれが、それぞれの「いのち」を精一杯生きていることへの共感に結ばれた関係のなかで得られる「かけがえのない自分」というアイデンティティーではないだろうか。

5 研究結果と考察

思春期の子どもとその家庭を取り巻く現代の環境と思春期の子どもをもつ親が育ってきた環境にはかなりの違いがあることを認識した上で、この時期の子どもに向かい合う親は、子ども時代とは違った新しい親子関係を築いていかなければならない。しかし、現状では、このことを認識できず、子どもとのかかわり方に不安や悩みをもつ親が多い。NHKや日本青少年研究所の調査によると、「権威のある親」より「友だちのような親」を目指している傾向にあり、本来親としての家庭において責任を果たすべき内容は、学校で教えてほしいと考える親が増えている。思春期の発達課題は、他人に依存する人間から独立した人間へと成長し、自己を確立することによって、大人のやり方で他人との関係を結べるようになることである。子どもが思春期をいきいきと生きぬくためには、親として自信と責任をもって子どもと向き合うことが重要である。そのためには、思春期の子どもの理解や子どもとの向き合い方などについての的確な情報やヒントが必要である。

6 おわりに

今回の研究では、思春期の子どもをもつ家庭を取り巻く現代の環境や親の子ども時代の環境などを探り、思春期の子どもの理解や子どもとの向き合い方などとともに思春期の課題について、様々な文献を通して考察を行ってきた。思春期の子どもをもつ家庭の支援についての具体的な方法については、全国の先進的な行政支援に学びながら、行政として成し得ることを実行していきたい。

参考・引用文献

- | | | | |
|--------------------------|-------------|---------|------|
| (1) 心の子育て—誕生から思春期までの48章— | 河合隼雄 | 朝日文庫 | 2001 |
| (2) 思春期のころ | 清水将之 | NHKブックス | 1996 |
| (3) 思春期を生きる力 | 石田一宏 | 大月書店 | 1999 |
| (4) 日本の高校生（国際比較でみる） | 千石 保 | NHKブックス | 1998 |
| (5) 親たちの「思春期」攻防戦 | 田中孝彦 高垣忠一郎 | 大月書店 | 1999 |
| (6) 中学生をわかりたい | 田中孝彦 高垣忠一郎 | 大月書店 | 1999 |
| (7) NHK中学生・高校生の生活と意識調査 | NHK放送文化研究所編 | NHK出版 | 2003 |
| (8) こんな中学校に変えよう | 田中孝彦 高垣忠一郎 | 大月書店 | 1999 |